

氏 名	萩 原 め ぐ み
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 26 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	日本語の談話におけるポーズ研究 －音響音声学的・日本語教育学的見地から－
論文審査委員	主 査 教 授 齋 藤 孝 滋 副 査 教 授 潮 村 公 弘 副 査 岩手大学教授 大 野 眞 男

論文内容の要旨

本稿は、以下の3つを目的に行われた研究である。

<目的>

1. 日本語学習者が、日本語母語話者にとって聞きやすい談話(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)を生成するための指標として、それぞれの「ポーズの規範」を作成すること。そして規範に基づいた指導効果を検証すること。
2. 上記3種類の談話は、ポーズの出現位置、時間長に相違があるかどうか、あるなら具体的に何が異なるかを明らかにすること。
3. ポーズの出現位置と、枝分かれ構造及び各文節の持つ意味的役割との関係を探ること。

全体の構成は、

- I：第1章・序論(本研究の目的、及び韻律論・談話論の先行研究概観)、第2章・聞きやすいスピーチにおけるポーズの特徴、第3章・聞きにくいスピーチにおけるポーズの特徴、第4章・マイナス要因を加工した聴取実験
 - II：第5章・スピーチにおける「ポーズの規範」作成の試み、第6章・プレゼンテーションにおけるポーズの特徴と規範、第7章・インタビューにおけるポーズの特徴と規範
 - III：第8章・スピーチ指導、第9章・プレゼンテーション指導、第10章インタビュー指導(3種類の異なる「ポーズの規範」を使った指導効果の検証)
 - IV：第11章・まとめと今後の課題
- となっている。

次に各章の詳細を述べる。まず、第1章で本稿のキーワードとなる「ポーズ」を説明するために、ポーズと他の韻律要素との関連性について述べた。ここで、韻律要素は単独で変化することではなく、相互に影響を与えながら成り立っていることを述べている。その後、談話論についての先行研究を概観している。ここで、インタビューはもとよりスピーチ、プレゼンテーションも「独話」ではなく、「談話」ととらえた経緯を述べている。第2章では、聞きやすいと評価された学習者のスピーチと母語話者のスピーチ暗唱について、ポーズを視点にそれぞれの特徴を分析し、共通点を考察した。その結果、

「基本的には右枝分かれ境界ではポーズが出現しやすく、左枝分かれ境界ではポーズが出現しにくい」という音読を使った先行研究を支持するものとなった。第3章では、聞きにくいと評価されたスピーチのポーズの特徴を探るため、母語話者の暗唱と比較し、相違点を探った。その結果、聞きにくいと評価された学習者のスピーチには、文末、接続詞、接続助詞、トピックの「は」の後のポーズが短いという特徴があった。第4章では、聞きにくいスピーチの資料のポーズ出現位置と長さのみを、聞きやすいと評価されたスピーチのポーズと同じになるように加工した資料を用いて、聴取実験を行った。その結果、加工資料のほうが、評価(①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さ)が有意に高くなることが分かった。

第5章では、学習者への指導を目的とした「スピーチのポーズ規範」を作成した。規範は以下の3段階から成る。

第一段階：発話節は、活用語で終わる「述語的成分」と、非活用語で終わる「補足的成分」に2分類される¹。そして、述語的成分の後には中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズが出現し、補足的成分の後には短い～中央値程度のポーズが出現する。

第二段階：述語的成分は、「言い切り」と「言い切り以外」に2分類される。そして、言い切りの発話節の後には非常に長いポーズが出現し、言い切り以外の発話節の後には中央値程度～長いポーズが出現する。

第三段階：補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で短い～中央値程度のポーズが出現する(例外①～④²を除く)。それは「順接」「逆接」「取立」「様態」「場所」の意味的役割を持つ文節の後と一致する。一方、左枝分かれ境界では、基本的にポーズが出現しない(例外①～⑥³を除く)。但し、「並列」の後には左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多い。

第6章では、第5章と同様の方法で「プレゼンテーションのポーズ規範」

¹ 助詞、助動詞は分類の基準には含まない。

² ①直前の発話節も右枝分かれ境界で、ポーズが出現している、②直後の発話節の後も右枝分かれ境界で、ポーズが出現している、③発話節が短い(ポーズなしで約15拍以内)、④左枝分かれ文での解釈が可能、という4つの条件下では、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

³ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、③発話節が長い(ポーズを挿入しないと約30拍以上続く)、④述語的成分で終わる発話節、⑤右枝分かれ文での解釈が可能、⑥並列、という6つの条件下では、左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

を以下のように作成した。

第一段階：述語的成分の後には、中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズが出現する。補足的成分の後には、短い～中央値程度のポーズが出現する。

第二段階：述語的成分の中で、「話題転換」「フォーカス語の前」では非常に長いポーズが出現する。

第三段階：補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で中央値程度～短いポーズが出現する(例外③⑦⁴を除く)。それは「逆接」の意味的役割を持つ文節の後と一致する。但し、「取立」「順接」「時間」「様態」は、右枝分かれ境界に該当しても、ポーズは出現しない。一方、左枝分かれ境界では、基本的にポーズが出現しない(例外①②⑥⑦⁵を除く)。但し、「並列」の後には左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多い。

第7章では、「インタビューのポーズ規範」を以下のように作成した。

第一段階：述語的成分の後には、中央値程度～長いポーズが出現することが多いが、短いポーズも頻出する。非常に長いポーズは出現しない。

第二段階：話者によっては、述語的成分の中で「言い切り」「話題転換」「フォーカス語の前」「言いにくい内容の前」で長いポーズが出現することがある。

第三段階：補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で中央値程度～短いポーズが出現する。それは、「取立」の意味的役割を持つ文節の後と一致することが多い。但し、「様態」「付加」「場所」「順接」「逆接」「時間」「手段」は、例外③⑦⁶に該当することが多く、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことが多い。一方、左

⁴ ③発話節が短い(ポーズなしで15～20拍以内)、⑦直前、直後の発話節にポーズが出現しているという2つの条件下では、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

⁵ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、⑥並列(特に助詞が省略され文節が並列するとき)、⑦取立の「って」の後、以上の条件下では、例外として左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

⁶ ③発話節が短い(ポーズなしで40拍以内)、⑦直前、直後の発話節にポーズが出現している、以上の条件下では、例外として右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

枝分かれ境界では、基本的にポーズが出現しない(例外①②⑧⁷を除く)。但し、「並列」の後は左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多い。

これら3つの規範を比較したところ、第一段階については、スピーチとプレゼンテーションには共通の特徴がみられたが、インタビューには異なる特徴がみられた。第二段階、第三段階については、3種類の談話にそれぞれ異なる特徴があった。

第8章では、日本語教育の現場に寄与貢献するために、スピーチのポーズ規範に基づき、初級学習者3名にスピーチ指導を行った。同様に、第9章ではプレゼンテーションのポーズ規範に基づき、上級学習者2名に指導を行った。第10章では、インタビューのポーズ規範に基づき、超級学習者2名に指導を行った。指導をした学習者の資料を実験群、指導を行わなかった学習者の資料を統制群として、評価を比較した。その結果、どの談話でも実験群の方が有意に高い結果が得られた。指導はいずれの談話でも20分程度と非常に短時間で済んでおり、今までの発音指導に比べて大幅に短い時間での指導に成功しているのが特筆すべき点である。また、アクセントや単音と違い、母語・あるいは母方言の影響が少ないポーズの指導のため、教師にとっても学習者にとっても、練習に入りやすい方法であると言える。

第11章では、全体のまとめと、ポーズの普遍性、ポーズ指導と日本語教育、到達目標の設定について述べている。最後に今後の課題として、1.聞きやすいプレゼンテーション、インタビューの基準の再考、2.本稿で扱った3種類のスタイル以外の談話のポーズと構文構造の関係の解明、3.日本語と他言語のポーズ出現位置との比較によるポーズの普遍性の解明、の3つをあげている。

⁷ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、および後、⑧考えている時、言いよどんだ時、以上の条件下では、例外として左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

審査結果の要旨

本論文の目的は、(1)日本語学習者が、日本語母語話者にとって聞きやすい談話(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)を生成するために、それぞれの「ポーズの規範」を作成し、その規範に基づいた指導効果を検証すること、(2)上記3種類の談話において、ポーズの出現位置、時間長に差があるか、あるならどう異なるかを明らかにすること、(3)ポーズの出現位置と枝分かれ構造、及び語類との関係を明らかにすることにある。

全体の構成は、序論～第4章：韻律論と談話論の先行研究概観、聞きやすい／聞きにくいスピーチの特徴、第5章～第7章：ポーズを因子とした合成音を使った聴取比較実験とスピーチ、プレゼンテーション、インタビューのポーズ規範作成の試み、第8章～第10章：ポーズ規範を使った3種類の異なる談話の指導効果の検証、第11章：まとめと今後の課題、となっている。

序論では、本稿のキーワードとなる「ポーズ」を説明するために、ポーズと他の韻律要素との関連性について、韻律要素は単独で変化することはなく、相互作用を繰り返しながら成り立っていることを述べながら、談話の先行研究を概観し、スピーチ、プレゼンテーションを独話ではなく、「談話」と捉えた経過について述べている。

第2章では、聞きやすいと評価された学習者のスピーチと母語話者のスピーチ暗唱について、ポーズを視点にその特徴を考察し、基本的に右枝分かれ境界ではポーズが出現しやすく、左枝分かれ境界ではポーズが出現しにくいという音読を使った先行研究と同様の傾向があることを確認した。

第3章では、聞きにくいと評価されたスピーチのポーズの特徴を探るため、母語話者の暗唱と比較し、文末、接続詞、接続助詞、トピックの「は」、接続詞の後のポーズが短いという傾向を見出した。第4章では、聞きにくいスピーチの資料のポーズ出現位置と長さのみを、聞きやすいポーズと同様に加工した音声資料を用いた聴取実験を行い、①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さの評価が統計的に有意に高くなることを確認した。

第5章では、学習者への指導のための3段階の「スピーチのポーズ規範」を作成した。具体的には、第一段階：発話節は、活用語で終わる「述語的成分」と、非活用語で終わる「補足的成分」に2分類される。そして、述語的成分の後には中央値～長いポーズ、または非常に長いポーズが出現し、補足的成分の後には短い～中央値のポーズが出現する。第二段階：述語的成分は、「言い切り」と「言い切り以外」に2分類される。そして、言い切りの後には非常に長いポーズが出現し、言い切り以外の後には中央値程度～長いポーズが出現する。第

三段階：補足的成分は、右枝分かれ境界で短い～中央値のポーズが出現することが多く、それらの意味役割は、「順接」「逆接」「取立」「動詞修飾」「場所」を示すものである。そして左枝分かれ境界ではポーズが出現しないことが多い。但し、「並列」の意味の発話節の後では、ポーズが出現するというものである。

第6章では、第5章と同様の方法で「プレゼンテーションのポーズ規範」を作成した。具体的には、第一段階：述語的成分の後では中央値程度～長いポーズ、非常に長いポーズを入れる。補足的成分の後には短い～中央値のポーズを入れる。第二段階：第一段階の中で、「話題転換」「フォーカス語の前」では非常に長いポーズを入れる。第三段階：補足的成分の後では、基本的に右枝分かれ境界で中央値程度～短いポーズが出現する。それは、「逆接」「取立」「順接」の3つの意味的役割と一致することが多い。但し、「時間」「動詞修飾」は右枝分かれ境界に該当しても、ポーズは出現しないことが多い。一方、基本的に左枝分かれ境界ではポーズが出現しない。但し、「並列」は左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多いというものである。

第7章では「インタビューのポーズ規範」を作成した。具体的には、第一段階：述語的成分の後には中央値程度～長いポーズが出現することのほうが多いが、短いポーズも頻出する。非常に長いポーズは出現しない。第二段階：話者によっては、第一段階の中で「言い切り」「話題転換」「フォーカス語の前」「言いにくい内容の前」で長いポーズが出現することがある。第三段階：補足的成分の後では、基本的に、右枝分かれ境界でポーズが出現する。それは、「並列」「取り立て」の2つの意味的役割と一致することが多い。但し、「動詞修飾」「付加」「場所」「順接」「逆接」「時間」「手段」の意味的役割の語の後では、ポーズが出現しないことが多い。一方、基本的に左枝分かれ境界ではポーズが出現しないというものである。

これら3つの規範を比較したところ、第一段階はスピーチとプレゼンテーションは共通するが、インタビューは異なる特徴がみとめられ、第二段階、第三段階については、3種類の談話にそれぞれ異なる特徴がみとめられた。

第8章では、スピーチのポーズ規範に基づき、初級学習者3名にスピーチ指導を、同様に、第9章ではプレゼンテーションのポーズ規範に基づき、上級学習者2名に指導を、第10章では、インタビューのポーズ規範に基づき、超級学習者2名に指導を行った。指導はいずれも20分程度と短く、学習者にも教師にも負担にならない時間で完了している。指導後を実験群、指導を行わなかった学習者の資料を統制群として、評価を比較したところ、実験群の方が有意に高く、本論文で構築した指導法の効果が十分に認められた。

第11章では、まとめと今後の課題を述べている。

本論文、新知見に満ち溢れており、特に次の点が、高く評価できる。

構文論的視点については、枝分かれ構造そのものを分析対象にするのではなく、文構造に関連した語類の属性（右分かれ指標）に着目した分析が、直接指導に応用可能であるという点。逆接の後にポーズが出現する傾向が大きいことの検証は、逆接が＜順接とそれに基づく予想・期待＞が前提となっている多段階の認知構造であることの傍証になりうるという点。＜フィルターとポーズの相補的關係＞及び＜ターン保持＞については、さらに発展した研究テーマとなりうる点。右分かれ等は＜言語内的・構造的要因＞に関する要因であり、聞き手との関わり等は＜言語外的・場面的要因＞である。そのような意味で、スピーチ・プレゼン・インタビューと発話レベルを分けて設定し、各レベルでポーズ支配要因を重層的に比較している点。

一方、解決が望まれる次のような問題点も指摘された。「は」の構文論的機能。いわゆる形容動詞の品詞論的位置づけ（補足的成分か述語的成分か）と処理方法。指導過程で、「述語的成分」「補足的成分」「右分かれ」「左分かれ」といったやや難解な文法用語がつかわれている点。統制群と実験群の学習者の習熟度は考慮されているが、一つだけやや差がみられる場合がある点。

しかし、これらの問題点は、すべて学界自体が未解決の問題として抱えているもの、あるいは、分析結果に影響を及ぼさない程度の問題であり、決して、本論文の価値を損なうタイプのものではない。

本論文は、スピーチ、プレゼンテーション、インタビューの聞きやすさ・聞きにくさに寄与するポーズの役割について、先行研究を踏まえて文構造（右分かれなど）に着目した分析を行っているだけでなく、各類型の談話におけるポーズ規範を作成し、規範に基づく実際の指導効果について検証を行い、理論と実践の双方にわたる往還が配慮されているという点で、音響音声学を踏まえた日本語教育領域の博士論文の内容に十分相当するものと判断される。以上より、審査委員会は、全一致で、本論文を、フェリス女学院大学人文科学研究科における博士（文学）の学位を授与するに相応しいと評価した。